

赤井まはるばる 知りば 標り町



第三十一弾 ワカメちゃんの鳴滝Stand-by-me編

鳴滝周辺には、
静かな住宅地がひろがっている。
新丸太町通りからはちよつと想像できない
閑静な町が広がっていました。

安田隆三・一代夫妻

割烹・蔵羅(くらら)をはじめ、仕出し料理店も切盛りするおしどり夫婦。ご主人は一代さんと結婚してからこの世界に“転職”、それまでは自動車のメカニックだったという。開店してまだ新しい蔵羅に今は夢中の二人だ。

赤いすまいば 知れり町の 標の町



銀いろのつめたいレールに
耳をあてて
鉄の鼓動が聴こえてくるのを
じっと待ちつづける。
微かな振動。
胸がドキドキしはじめる。
やがて電車が現れて
みんなワツと、駆けてゆく。

京都市右京区鳴滝嵯峨園町。

京福線鳴滝駅のすぐそばに、蔵のかたちを模した割烹料理店がある。蔵羅と書いて、くらら。と読ませるその店は、安田隆三さんと二代さん夫婦が二年前にはじめた。

向いがわの仕出し料理店もふくめ、店の基盤は一代さんの父が築いている。夫の隆三さんもこの町に来てずいぶんになるが、この町で生まれ育ったのは妻の一代さんだ。

嵯峨園町は新丸太町通り・常盤界隈より北に位置する。ほそい道を山手にゆけば、大きな邸宅や御陵、造園業者の林地が広がる閑静な住宅地だ。その雰囲気は、どこか下鴨や紫野あたりの街角をほうふつとさせる。

一代さんが子どものころ、というところ、二十数年の時をさかのぼることになる。だが、町の風情は当時も今も、それほど変わってはいないようだ。だから、思い出を語る彼女の言葉にも、懐古の

感情はそれほどあらわれない。

「しょっちゅう、ちいさなケガをしなから遊んでいたように思います。現在ほど自動車の往来がありませんから、自転車で来ってもフルスピードで走り回ることができました。

はじめてヨコダマ（補助車輪）なしに自転車に乗ったときも、ブレーキのかけかたが満足にわからないのに速度を出して走ったものですから。そのま

ま鳴滝駅へ突進してプラットフォームから線路へコロガリ落ちましたねえ。今でも改札口はないし、のんびりした駅なんですけれど、当時はもつとどかな駅だったなあ。男の子も女の子も、駅ではいろんなことをして遊んでましたね」

ゲタかくし。
最初の一步。
なつかしい名称が次々とでてくる。どんな場所でも子どもは遊び場にしてしまうものだが、その雰囲気想像す

ると、どういふものか、アニメ映画の「思い出ほろほろ」を連想した。

「こころいえば、駅では結構スリルのある遊びもしてましたねえ。線路に耳をあてると、遠くから電車がくるのがわかるでしょう？ みんなで線路に寝そべって、つめたいレールに耳をあてて、その音がくるのをじっと待つんです。

それで、そのままの格好でどこまで辛抱できるか、というのを競うんですよ。車掌さんに見つかるとものすごく怒られますから、発見されない程度に電車が来るまでガマンするんです。男の子も女の子も、みんな一緒に挑戦していたなあ。

まあ、のどかな時代のことですから、そういうこともできたんでしょうね。電車も今はワンマンになっていますが、れど、当時は車掌さんが乗ってましたから、タッチの差で乗り遅れることがあっても、「ちょっと待って！」

と叫べば電車も止まってくれるんです。それで、ホイ、と乗ることも出来たんですよ。そうですね。ほんとに、のんびりしてました」

駅のほかにもうひとつ、近隣の子どもたちがいつも遊んだ場所がある。音戸山（おんどやま）。

訪ねてみれば、それは山というよりは丘に近い。だが小さな森と小さな広場、それにちよつとした草群もある。「音戸山ではよく遊びました。ここには広場と、ちよつとした急斜面があるんです。子どもの頃は、それが立派なガケに見えていたんですよ。

それで、そのガケの上から下へ降りることが、当時の私たちにとってはスゴイことだったんです。もう、スリル満点。もちろんガケから落ちてしまうこともあって、やっぱちよつとしたケガもするんです。でも、何度くりかえしても面白かったなあ。この音戸山っていうのは、もう、何

巧の章

京ごころ

歳月は流れど、
ハッ橋づくりの心意気は変わらず。



都に息づく銘菓、ハッ橋。300年以上のむかし、一枚の既成きんせんべいとしてうぶ声をあげるのちに、さまざまなかき揚げを背景に独自の発展を遂げ、京都を代表するお菓子として人びとに親しまれるようになった。その歴史を語るとき決して忘れられないのが、ハッ橋づくりを支えてきた職人たちの存在である。美しい容姿と上品な味わいを確立する過程には、数限りない試行錯誤があった。

ハッ橋が全国に名を馳せたのは明治以降、蒸産のシステムが整い、いつでも買うことができるという、名物としての条件が満たされるようになったのも、近年のことである。それまでは、ひとつひとつ鉄板の上で焼く、

文字どおりの手づくり。一日に生産できるかずは、現代とは比較にならないほどだった。こうした状況のなか、井筒ハッ橋本舗は、いち早く機械化を導入。ハッ橋づくりは、新風を吹き込むと同時に、職人や従業員の労働を軽減し、さらには旧式の製造をつづける同業者にも柔軟な姿勢を示した。

季節やその日の天気によって、具合いが異なり、ときに表情をもつことかもしれない。しかし、それはハッ橋を普及させた要素であることを、だれが否定できようか。歳月は流れ、ハッ橋の歴史もささげられる。そして、変わらぬものは、ひとつ。伝統のなかで受け継がれてきた職人たちの心意気である。

井筒ハッ橋本舗

紙園店 京都市東山区川端通四条上ル

☎(075)531-2121(代表)
営業10:00AM~10:00PM
年中無休



高戸山の広場は、一応？私有地である。ちゃんど門もあるのだが・・・



高戸山広場の草群にて。スポンにたくさん付いてしまった「ひつつき虫」(草の実)を取っているのは、夫の隆三さん。



今は廃業してしまった駅前のお菓子屋さん。一代さんの「ワカメ・カット」売場の地である。



昔は気付かないけれど、改めて眺めればすいぶん変わった所もあるなあ、と想い出に浸る一代さん。



高戸山の近くにある「ひょうたん池」。大蛇がでる、という言伝えがあった。フナや鯉が釣れるという。

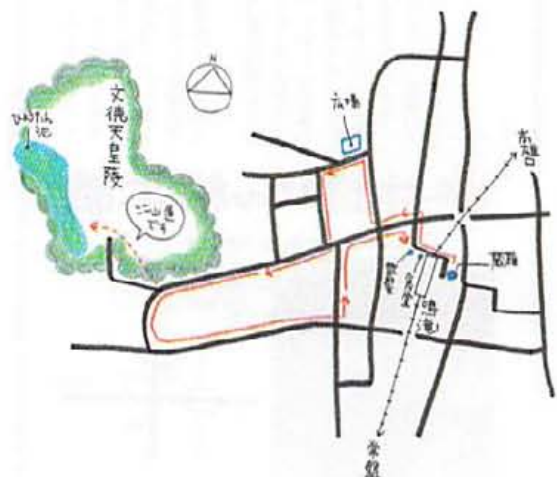


町の中に広がる造園用林地の一角。美しい精好の杉や松がたくさんある。

すまじょう 赤い標の町



海の魚や貝。山のきのこや山菜。
いろんなもの
みずみずしさ
いのちの息吹を
そっとすくいあげて
テーブルに灯してゆく。
それが私たちのお店です。



十年もずつとそのままになってるんですよ。一応、私有地なんですけれど、子どもたちは勝手に出入りしているんです。この近所でも、親子二代での広場で遊んだことのある家が多いと思います。遊ぶモノ、すべり台とかは何もないんですけど、そういうものか子どもたちはみんなあの場所に惹かれていきますね。

今では未舗装の道など、めったに見かけなくなりました。だが、一代さんが子どもの頃、あたりはみな地道だった。男の子たちは地面に穴を掘ってビー玉遊びをしていたし、女の子は、かかしの絵をかいてケンケン遊びをしたり、手鞠つきやゴム飛びで遊んでいた。家に閉じ込められて遊ぶ子どもなど、まっさいなかった。

「この近くには御陵さんもありますけれど、入ってはいけないところですから、遊び場にはなりませんでしたね。お祭りといえば、福王子神社の縁日があります。夜店がずつと並びますから、これはたのしみでした。うーん。あと、遊び場所といえばどこがあったかなあ……そういえば、この近所には大手メーカーの社長さんや会長さんの家がたくさんあるんです。そういう家の庭で子どもの頃、セミとりなんかで勝手に遊ばせてもらいましたねえ……」

たにちがいない。
ところで、割烹・蔵屋。では炭火で焼く明石産のアナゴや活け蛸、貝柱などが旨い、一代さんのアイデアでユニークなメニューが出されている。
ジャガイモにすこしサツマイモを混ぜてすりつぶし、油揚げにくるんでサツと揚げた。特製コロケは相風だしにつけて食べるが、これも一代さんがお店に提案したものだ。鳴滝のワカメちゃんも、今では立派なおかみさんである。

それはおよそ次のようなものだ。
げたかくし、ちゅうもんや
はしらのしたの、ねずみは
ぞうりをくわえて、ちゅうちゅうちゅう
ちゅうちゅうくまんじゆはだれがくうた
だれもくわえない、わしがくうた
おもてのかんばん、しやみせんや
うらからまわつて
さんげんめ

民俗学の本などをみると、子どもの遊び歌にはすいぶんと凄じい（あるいは怖い）意味をもつものも多いようだ。この歌がそれほどのものだとは思わないが、いまだに由来や意味がわからない。紙面のシブツ化は恐縮なのだが、読者の中で誰か知っている人がいれば、ぜひ編集部宛、お教え願いたい次第である。

mod's hair

Les coiffeurs des magazines



Impressions d'ailleurs
Touch of Orient
1993-1994
Automne-Hiver

北山店11月27日土OPEN!

712・4855

京都市北区上賀茂沿一帯内町1番地セレス北山2F



一回編成の電車だが、綾畑野原から市内をむすぶ貴重な“足”である。



近所で“御陵さん”と呼ばれているのがこれ。正式名称は文徳天皇陵。勝手に中へは入れない。



音戸山広場は周りを木立が囲っている。すいぶんと背の高いキンモクセイも並んでいた。



「こないして、町内をふたりで歩くのもひさしぶりやなあ」「ほんとやねえ」



駅前の食堂にて。ここのおかみさんは、一代さんのお友達。小さい頃の思い出をすこし話っていたのだ。



みどり豊かな町内には、よくみるといるんな“植生”を観察できる。



これは感嘆の店内。洒落た造作のカウンターは、ゆっくりとくつろぐことが出来る。

取材・文／村上 慧
写真／大田メグミ